

埼玉育ちのグローバル人

卓球を通して見る中国と日本

～二つの故郷が私にくれた宝物

第2回 「コーチとして」

卓球プロコーチ

鄭 慧萍 (テイ ケイヒョウ)



埼玉県マスコット「コバトン」



前回は中国での選手時代に学んだことを書きました。今回は中国から第二の故郷であるここ日本に渡って、トップ選手のコーチとして経験したことをお話ししようと思います。

「留学生として渡日し学校に行きながら、子供たちに卓球を教えてみないか」というお誘いを中国卓球協会からいただいたのが、私が日本に来るきっかけでした。

実は選手の時代から、元々言葉を学ぶことに対してとても興味があり、選手を引退したら通訳か記者をやりたいなあと思ったこともありましたが、ただ、選手時代は卓球に没頭していて、なかなか勉強する時間がなく、(これは言い訳になってしまいますね)結局その夢は叶いませんでした。

ですが、言葉の勉強をしたい気持ちは依然自分の中に強く残っていたので、卓球だけではなく、勉強もできると聞いた時は、形は違えど夢がかなうと思いき喜んだものでした。

そうして私は来日し、専門学校と卓球センターを運営している理事長の家に下宿しました。一年目は勉強と子供たちに卓球を教えることが主で、たまに自分の練習をするような毎日でした。「教える」というと、私がどのようにして日本語を勉強したのか気になった方もいらっしゃるかもしれません

ので私が「言葉を学ぶ」という挑戦を通じて学んだことに関して少しお話しします。

外国に住むとなった際、一番の壁と言われて思いつくのはやはり言葉ですね。私が来日した際、私を含め三人の女子がいたのですが、その中で日本語ができたのは私だけでした。日本語ができるといっても、中国にいた頃の日本語が少しわかる友達に「あいうえお」を教えてもらったただけでした。今のようにインターネットもありませんでしたので、ドラマをみて文脈で意味を推測して辞書で調べたり、他の二人の通訳を頑張ったりと地道に日本語を学んできました。そして今となっては特に言葉に困ることなく仕事も生活もできています。(もちろん、完璧ではないのですが)

人間はとても強く、自分が必要性を強く感じた時にはどんなことだって成し遂げられる可能性を秘めている生き物です。ですので皆さんも目の前に何かチャンスが転がっていた時に、「自分ならできる」という気持ちで一度挑戦してみてください。きっと思いも寄らない結果や学びが得られると思います。

専門学校を卒業した後は社会人チームに入って、一年間だけ選手に復帰して、試合に参加しました。日本に来た最初の三年間はコーチとして活動しつつも、選手として試合に出場していました。コーチとしての知見も活かしたおかげで、全日本社会人選手権シングルス、ダブルス優勝、全日本選手権ダブルス

ルス、ミックスダブルス優勝、(当時外国籍の選手はシングルスには参加できませんでした)東京選手権シングルス優勝を果たしました。

その後は、現役を引退して、コーチに専念するようになりました。



ベンチコーチとして
(2009年世界卓球選手権横浜大会)

コーチとして、トップ選手たちを教えて感じたのは、「目標に向かって頑張り続けられる人」だけがチャンピオンになれるということです。卓球界では、引退した福原選手、今世界で活躍されている伊藤美誠選手、平野美宇選手たち、皆さん小さい時から志を大きく、将来チャンピオンになるんだという目標を持って卓球をしていました。

スポーツは常に勝敗がつきます。毎日練習しているから、必ず勝てるとの保証もありませんし、今日勝っても、明日負けることもあります。勝った時は自信もつきますが、負けた時や練習がうまくいかない時、選手も人間ですので、心が折れて、もうやりたくないという気持ちになることもあります。その時心の支えになるのは、自分が将来チャンピオンになるんだという信念だけです。その目標を達成するには、目の前の困難を一つ一つ乗り越えていくことが唯一の道です。選手自身はもちろん、周りでサポートするコーチ、スタッフの方もこの

道だけは避けて通れないのだと認識して、日々戦っています。

私自身もそうですが、卓球を始めてまもない頃父が代表選手のことを書いた本を私に見せて、将来はこうなるんだと言われたことが、いつしか自分の信念となり、中国代表に上り詰めるにあたって、苦しい場面での支えになってくれました。

スポーツに限らず、みなさんが何かを成し遂げようとしている時、きっと様々な困難が待ち受けているでしょう。心が折れそうな時はいっぱいありますが、常に自分の目標を忘れず、そして目標を達成した時の自分の喜ぶ姿を想像しながら乗り越えていきましょう。